The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	救命センター看護師指導による簡易型BLS演習における看護学生への影響 : 臨床と大学とのユニフィケーションによる効果
Author(s)	白井, 里佳; 新開, 裕幸; 呉, 聖人 他
Citation	大阪大学看護学雑誌. 2011, 17(1), p. 17-24
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56676
rights	©大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

-研 究 報 告-

救命センター看護師指導による簡易型BLS演習における看護学生への影響
～臨床と大学とのユニフィケーションによる効果～

白井里佳* 新開裕幸* 呉聖人* 山邉えり* 田中博子* 師岡友紀**
池側均* 瀬尾恵子*

要 旨

臨床と大学とのユニフィケーションがより意義あるものとなる為には、学生の満足感や、教育効果に関して明確にしていく必要がある。そこで救命センター看護師が学内演習で簡易型BLSを指導することで学生に与える影響を把握することを研究目的とした。対象はA大学看護学専攻3回生85名とし、演習に対する満足度と救急看護への関心など3項目と、ユニフィケーションの意義に関する自由記述を求めた。回答が得られた68名のうち、演習の満足度には、100.0%が満足していると回答し、救急看護への関心は演習後に増加が見られた。ユニフィケーションの意義について回答をカテゴリー化し検討していく中で、救命センター看護師が学生へ指導することで、豊富な事例にもとづく説明や現役で働いているという説得力からリアリティを感じ、分かりやすさや学習動機に繋がるなど、プラスとして働く要因となったことが示唆され、臨床の看護師が学生指導に関わることの利点が多く示された。

キーワード：ユニフィケーション，救命センター看護師，看護学生，簡易型BLS演習，
Key Words : unification, ER Nurse, Nursing Students, A Simplified BLS Training Program (Chest Compression Only),

I. はじめに

ユニフィケーション（unification）は、一般に統合や統一と訳される語であるが、「看護におけるユニフィケーション」といった場合、臨床現場（病院）と教育機関とが連携し、看護実践・教育・研究に取り組む試みを称するとされる[1]。

我が国の看護におけるユニフィケーションは1980年代に米国の試みが紹介されたことが始まりとされる[2]。具体的な例として、ペンシルバニア州立大学とウィスコンシン大学では、大学教員と大学院生が共同で患者ケアにあたる「統合(臨床に教育を組み込んだ)モデル」や、臨床と教育が相互に影響を与えることで、看護が専門分野として高まっていくことを目的とする「パートナーシップ・モデル」が提唱された[2]。看護のユニフィケーションは、元来、1960年代の米国において、学士課程の増加に伴い、臨床と教育との乖離に関する問題意識に端を発しているが[2]、近年の日本も同様で、大学化が進んでおり、共通する点も多いと推察される。ユニフィケーションの試みは今後の日本の看護において必須と考えられる。

大学と臨床とのユニフィケーションによる効果は、歴史的な背景からも察することができるように、教員側・臨床側にとっての利点が報告されてきた。たとえば、1993年にポタッシュとテーラーが提唱した方法では、看護教員が自らの臨床実践をデザインして目標設定し、日常業務の中に実際のケアを取り込んでいく「実業家モデル」と言われる方法などである[2]。しかし、学生側の視点にたった報告はそれほど多くない。過去の研究では、共同授業と呼ばれる看護技術習得を目指す目的で取り組まれた演習方法の実施[3]などが挙げられるが、一般的な看護技術の指導にとどまっており、看護師の専門性や病棟の特殊性による影響は捉えられていない。ユニフィケーションがより意義あるものとなるためには、学生にとっての満足感や、教育効果に関しても明確にしていく必要がある。

救命センターは、患者の病状がクリティカルであることからも、実習がしにくい領域である。臨地実習がないことで、イメージ化が進まず、志望に繋がらなかったり、全く現場を知らないまま入

*大阪大学医学部附属病院 **大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻

職したりすることの弊害が大きいと考えられる。例えば、リアリティショックに影響を与える因子として、「看護実践能力の不足」と「就職病棟の診療科の種類や複雑さ」があげられるが[3]、救命センターは、予測されない外傷や疾患への対応、急変時の迅速さが求められるため、早い段階での多くの技術習得や対応能力を備えた自立が要求され、元来、リアリティショックの大きい領域と考えられるためである。しかし、学内演習に救命センターの看護師が関わることで、学習効果を期待するだけではなく、学生への進路検討への示唆も与えることが可能と考えられる。ただし、これまで研究では検討されていない領域であり、短時間であるため、臨床のスタッフと接するにあたり、学生がどのような期待をして臨むのか、実際に進路選択への影響があるかどうかは不明である。

そこで今回の研究目的は、救命センター看護師が学内演習で簡易型BLSを指導するという臨床と大学とのユニフィケーションによる効果を、学生に与える影響という視点から把握する。具体的には、①演習の満足度、②演習による救急看護への興味関心の変化、③学生の捉えるユニフィケーションの意義という３つの視点から捉えていく。

Ⅱ．研究方法

１．研究デザイン

独自で作成した無記名の自己記入式質問紙法にて、演習効果を量的に評価するとともに、その詳細（内容）を質的に把握する、量・質併用のデザインとした。

２．対象

A大学（四年制総合大学）医学部保健学科看護学専攻3年次学生85名とした。

３．調査方法

１）質問紙配布回収方法

(1)演習前調査：演習数日前、当該演習とは無関係の講義終了後、研究者が対象者に説明文書を用いて口頭で調査への依頼を行い、質問紙を一斉配布した。

(2)演習後調査：演習終了直後に研究者が説明文書を用いて口頭で依頼を行い、質問紙を配布した。

２）回収方法：演習前後とも回収は、回収箱と郵送を併用した。

３）対象者の連結：演習前後の回答を連結させるため、無記名調査ではあるが、誕生日とイニシャルの記入を求めた。

４）調査時期：平成21年5月

3年次は領域別実習前の時期であり、必須科目内で演習を企画した。

４．調査内容

調査票の質問項目は、先行研究を参考に研究者間（A大学医学部保健学科教員1名、救命センター経験10年以上の看護師1名、救命センター経験2~3年目の看護師4名）で検討の上、独自に作成した。

１）演習の満足度（演習後質問項目）

演習に対する満足度1項目を、6段階評定で回答を求めた。

２）演習による救急看護への興味関心（演習前後質問項目）

救急看護への興味関心、救命センター看護師を志望する程度、救命センター看護師と一次救命処置（Basic Life Support(以下BLSとする)）との関連性、BLSを繰り返し学習する意欲など3項目を、いずれも6段階評定で回答を求めた。

３）学生の捉えるユニフィケーションの意義

以下の項目に関して、自由記述で回答を求めた。

演習前の興味関心：「救命センター看護師に質問したいこと」について1項目

演習後に感じる意義：「救命センター看護師がBLS指導することをどう思うか」について1項目

４）属性に関する質問

年齢・性別など、基本的属性に関する項目

５．演習内容

85名の学生を6～7名の12グループに分け、インストラクターとして、看護師計4名を各グループに1名ずつ配置し、4グループ毎に60分間の簡易型BLS演習を行った。60分の内訳は①インストラクター自己紹介・デモンストレーション（15分）、②各グループで指導と実技（40分）、③質疑応答（5分）とした。簡易型BLSの指導内容は、日本救急医療財団が推奨する「指定事業者が実施するAED認定使用者講習」の枠組みを参考にし、倒れている成人に対しての反応の有無の確認、気道確保と呼吸の確認、胸骨圧迫、AED操作を指導したが、人工呼吸の指導と実技を省略した。講義や演習時間は限定的で、短時間に効率良くBLS指導を行うことが必要であり、先行研究においては、胸骨圧迫のみに蘇生法を単純化することで短時間の教育であっても、正確な胸骨圧迫の実施が可能であることが示されている[4]ことを考慮し、人工呼吸の指導と実技を省略した。演習における工夫として、事前に妥当なレベルの目標設定を普段か

ら学生教育に関わっている教員と設定するとともに、目標達成のための体制など演習形態に関して議論の上、ともに準備を行なった。また、救命救急センターの看護師という専門性を生かし、演習時のデモンストレーションとして、緊迫した環境の中、BLSがどのような流れで進んでいくか、どんな技術が必要であるのかを体感できるように配慮すること、学生に実際の現場のイメージがつきやすい内容を提供し、身近でリアルな状況設定を行うなどの工夫を行った。また各グループでの指導内容についても指導者間で事前に申し合わせをし、統一したものとした。さらに、個々の学生の学習ニーズに対応するために、グループでの実技演習終了後に質疑応答の時間を設けた。その後、全体を通して学生へフィードバックを行い、指導内容に偏りが無いよう努めた。

6．分析方法

選択による質問項目に関しては、それぞれの回答の比率を演習前後で比較するとともに、分布の差異を検討する目的で、Mann-WhitneyのU検定を行った。危険率5%未満の場合に、統計学的有意差ありとした。自由記述に関しては、内容分析の手法をとり、SPSS Text Analysisを用いてコード化し類似性にしたがって分類し、カテゴリー化を行った。

7．倫理的配慮

対象者に対し、研究の目的、意義、方法、および調査は自由意思による参加であり、成績とは無関係であること、個人情報保護を厳密に行うことを、文書を用いて説明し、質問紙の回答をもって同意とみなした。また本研究は大阪大学医学部附属病院看護倫理審査委員会の承諾を得て行った。

III. 結果

1．対象の属性

対象者は、85名の受講生のうち、演習前が72名（回収率84.7%）、演習直後が75名（回収率88.2%）であり、演習前後で質問紙が連結できたものは68名（80.0%）であった。今回この68名を分析対象とした。対象者の性別は、男性12名（17.6%）、女性56名（82.4%）、平均年齢20.4±0.7歳であった。

2．演習満足度

「BLS演習にはどの程度満足していますか」の質問に対し、「非常に満足している」が56.2%、「かなりの程度満足している」が37.0%、「ある程度満足している」6.8%と、対象者の100.0%が満足しているという回答であった。

3．演習による救急看護への興味関心の変化

「救急看護にどのくらい興味がありますか」の質問に対して、「非常にある、かなりある、ある程度ある」と答えた人が演習前95.8%、演習後は97.3%であった。「あまり関心がない」と答えた人が、演習前4.2%、演習後は2.7%であり、「ほとんど関心がない、全く関心がない」はともに、0.0%であった。「救命センターの看護師になりたいと思いますか？」(図1)の質問に関して、「非常にそう思う、かなりそう思う、ある程度そう思う」と答えた人が演習前53.5%、演習後は62.3%であった。「今後繰り返し一次救命処置を学びたいと思いますか」(図2)の質問に対して、「非常にそう思う」と答えた人が演習前22.5%、演習後は52.7%で有意な分布の差が認められた（$p < 0.01$）。

図1 救命センター看護師になりたいと思いますか(n=68)

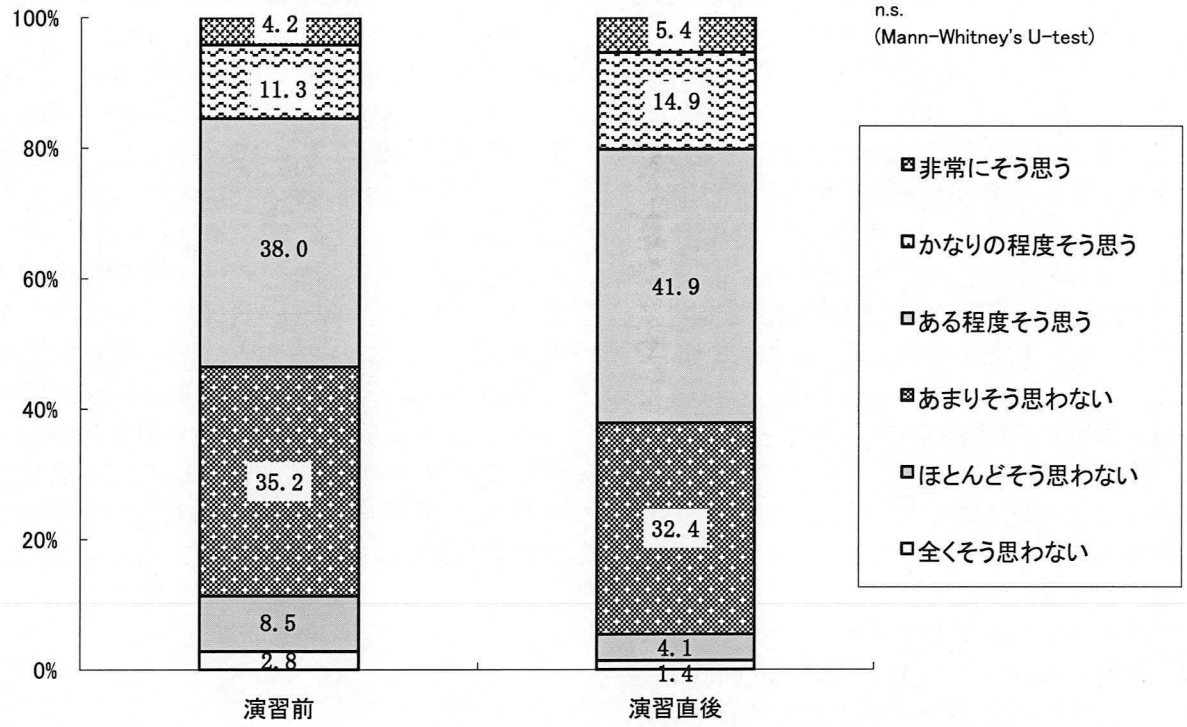
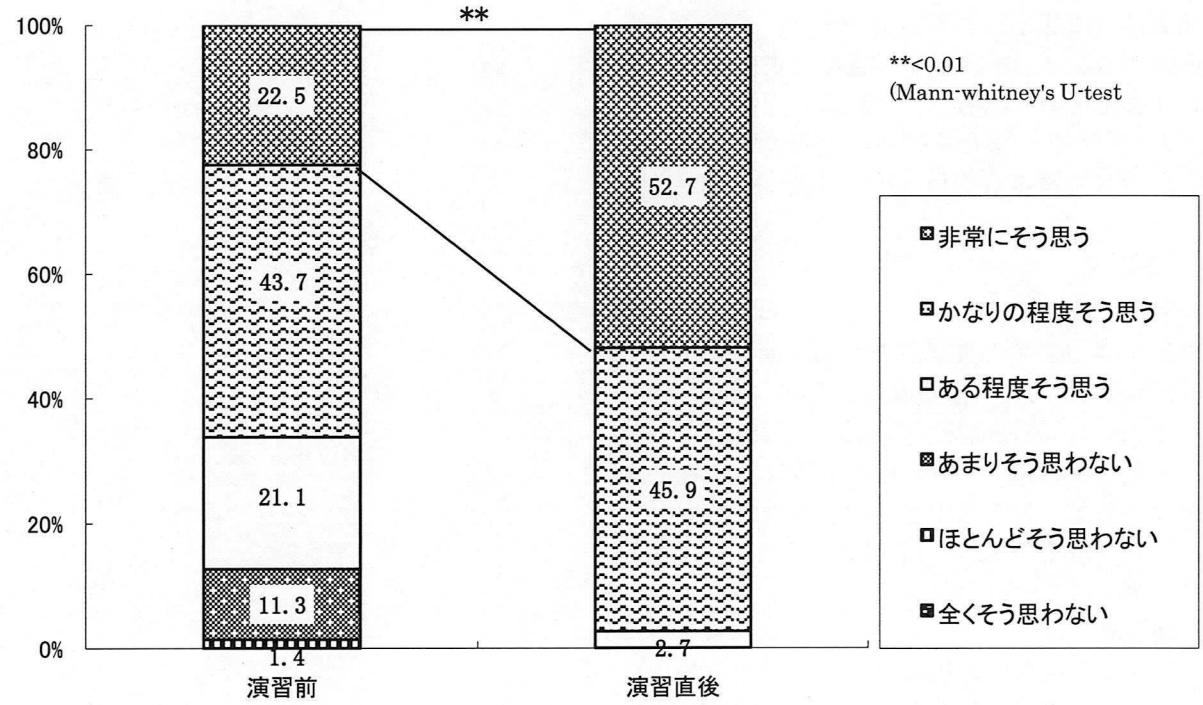


図2 今後繰り返しBLSを学びたいと思いますか(n=68)



4．学生の捉えるユニフィケーションの意義

1）演習前の興味関心について

救命センター看護師へ質問したい内容についての自由記述回答は、「救命センター看護師の姿について」「救急現場における不安への対処について」「技術、その他」の主な3つのカテゴリーに分類された。それぞれの具体的な内容として、表1に示した。救命センター看護師の姿」の詳細としては、「実際の仕事がどのようなものなのか」「仕事は辛いものではないのか」「なぜ救急を選んだのか」「どのようにしたら救急領域の看護師になれるのか」などであった。「救急現場における不安への対処について」の詳細は、「救急現場で不安に陥ることはないのか」「冷静に対処するためにはどのようにしたらよいか」であった。「技術、その他」についての詳細は、「実際の観察技術」「BLSそのものに関すること」や、「漠然と色々聞きたい」という内容であった。

2）演習後に感じる意義

救命センター看護師が看護学生に対して一次救命処置演習の指導をすることについては表2に示したように「現役の救命センター看護師であるというインパクト」「専門性にもとづく看護技術演習の満足感」の2つのカテゴリーに分類された。「現役の救命センター看護師であるというインパクト」の具体的な内容については、「現場のリアリティが伝わる」「現場の話を聞くことができ勉強になる」「現場の生の声を聞くことができる」「進路選択の参考になる」「具体的な話を聞く事ができわかりやすい」「指導に説得力があるのが良い」「学習の動機づけが高まる」「自分の技術に自信がもてる」であった。「専門性にもとづく看護技術演習の満足感」の具体的な内容については、「専門家に対するリスペクト」「演習の雰囲気が良かった」「わかりやすかった」「もっと話が聞きたい」であった。それぞれの代表的な記述に関しては、表2に示した。

表1.「救命センターの看護師に質問したいこと」に関する自由記述の内容分析

カテゴリー	サブカテゴリー ( )内は件数	代表的記述
救命センター看護師の姿について	救命センター看護師の仕事の実際 (5件)	救命センターのナースの仕事の実際を聞きたいです
	救命センター看護師の辛さについて (4件)	やはり過労働なのですか
	救命センター看護師を志望した理由 (3件)	どうして救命センターの看護師になろうと思ったのですか
	救命センター看護師になるための方策 (1件)	救命センターの看護師になるためにはどうすればいいのか
	救命センターの特性とは (1件)	一般病棟と救命センターとのおおきな違いは？(勤務内容や処置の内容など)
救急現場における不安への対処について	救急現場における不安の有無 (3件)	生命が危ない患者さんを前にして不安になることはないですか？
	救急現場で冷静に対処するための方策 (2件)	冷静に対応するにはどうすればいいですか
技術、その他	(救急)患者の観察ポイントについて (1件)	患者さんを初めて見たときに注目するのは何について(どこ)ですか。
	一次救命処置について (1件)	誰でも一次救命は資格あればやっていいのか？
	いろいろ聞きたい (1件)	実施中に色々聞くと思います

表2.「救命センターの看護師が一次救命処置の指導をすること」に関する自由記述の内容分析

カテゴリー	サブカテゴリー ( )内は件数	代表的記述
現役の救命センター看護師であるというインパクト	現場のリアリティが伝わる (7件)	実際に現場で働いておられるので、現実感があってよかったです
	現場の話を聞くことができ勉強になる (7件)	実際の話も聞かせていただくことができてすごく勉強になりました
	具体的な話を聞く事ができわかりやすい (7件)	実際のエピソードなどを交えて指導してもらえるので良いと思う
	指導に説得力があるのが良い (4件)	現役の看護師さんなので説得力があり、分かりやすかった
	学習の動機づけが高まる (3件)	実際に今、救命センターに勤めている人なので、言っていること一つ一つに集中できる。教員の場合よりも熱心になれた
	現場の生の声を聞くことができる (2件)	現場の人の声が聞けて良い
	進路選択の参考になる (1件)	今後の進路の参考になった
	自分の技術に自信がもてる (1件)	実際に働いている方なのでその方に教えてもらうことで、自分にも自信がもてる
専門性にもとづく看護技術演習の満足感	専門家に対するリスペクト (6件)	専門としている人なので教え方が実践的だったのがよかった
	もっと話が聞きたい (3件)	もっとお話を聞いてみたかったです。
	わかりやすかった (2件)	わかりやすかったです。
	演習の雰囲気が良かった (1件)	よい雰囲気があって良かったと思う。デモが良かった

IV. 考察

1. 演習の満足感について

演習後、BLS演習に対する満足度(図1)について、過半数の学生が、「かなり満足している」と回答し、満足していないとの回答は全くなかった。このことは演習が非常に満足感の高いものであったことが察せられる。その理由としては、演習後の「専門家に対するリスペクト」「演習の雰囲気が良かった」「わかりやすかった」「もっと話が聞きたい」など、現役で働いているという立場の説得力に加え、演習の雰囲気作りや豊富な事例にもとづく説明が、学生の満足感に繋がったと考える。庄村は、教育担当者が支持的な助言を返すことで、新人看護師は、演習を通して自ら学ぶ経験だけでなく、自分の看護に対する不安までも受け止めてもらえたと感じ、満足や安堵に繋がると述べている[5]。普段接することの少ない救命センター看護師から直接関わり指導を受けることで、実習で経験できない看護技術を学び、実際の体験談を聞いたり、自己の不安な部分を解消できたことによる満足感が、結果として表れたと考える。

2. 演習による救急看護への興味関心の変化

本学においては、看護学生の実習病棟に救命救急センターは選択されておらず、救急看護に携わる看護師と看護学生の接点は非常に少ない環境にある。しかし、演習前に救急看護に興味があると答えた看護学生が95.8%であり、救急看護への関心の高さは示されていた。このことは、救急領域の看護の実際はわからない段階でもかなり多くの学生が興味関心を抱いているという状況が推察され、臨地実習がない環境での、救命センターの看護師に接する機会を呈するこのような取

り組みは、学生の好奇心を満たす良い機会であったと考えられる。また、救命センターの看護師になりたいと思う学生が演習後に増加していたことから、指導者がロールモデルとなったことで、医療従事者としての自己の将来像をイメージすることに繋がったと考えられる。山内らは、職業的アイデンティティの形成過程の中心的なテーマは、看護職は自分に向いているか、自分にできるかといった自分探しであり、主体的な看護体験によって学生の内面に感動が起き、それが指導者によって是認され、意味づけされると、学生は看護に動機付けされると述べている[6]。このように臨床の看護師が学内演習で学生指導に関わることで、インターンシップと同様の進路選択における効果が得られた可能性が示唆される。

3．学生の捉えるユニフィケーションの意義

今回、演習開始時に、看護学生が実際に想像しやすい内容を想定しデモンストレーションを行った結果、演習前には冷静に対処できるかどうかという不安を示唆する記述が認められたが、演習後には、演習の雰囲気の良さや指導の在り方など、実際の指導技術に対する好ましい評価も得られていた。

表1からもわかるように、演習後に多くの看護学生が、現役の救命センター看護師が指導することのインパクトの大きさについて述べている。大山らは、学校と臨床の協働による看護技術演習の実施の中で、「学生は臨床指導者の発言に高い関心を示すことから、いろいろな側面から刺激し、意識を高めることで指導・演習の効果が得られることを実感した。」と述べている[7]。また池西は、臨床で起こりうる状況や場面を設定し、学習目標に沿って作成した課題を通して学習することで、状況判断能力や問題解決能力を身につけるProblem based learning(PBL)教育方法の有効性についても言及している[8]。今回の演習方法として、グループを少人数化し、看護師と看護学生が直接関われるような指導体制をとることで、臨床の具体的な生の声が聞け、実践に基づいた指導を受けたことで、分かりやすく理解できたと実感が得られた学生が多かった。また、どんな人が救命センター看護師として働いているかを知ることが出来るなど、救急の実際を看護学生が直接感じ取ることで、今まで、身近に感じていなかった救急看護が、よりリアルに伝わり、興味として、関心が高まったと考える。

救急看護については、臨地実習などでは経験できない領域ではあるものの、BLS技術は医療従事者としては必須の習得すべき技術である。しかしながら、演習前12.7%の学生が「繰り返しBLSを学びたいという意欲が、あまりない、または全くない」(図5)と答えている。これらの学生には、救命センターの特性や、救急現場での対処や技術に対する不安、実際の臨床現場での労働業務の先入観も影響したことが考えられ、救急看護への消極的なイメージがある可能性が読み取れる。しかし、救命センター看護師が、実際に経験してきた豊富な情報に基づいた、知識・技術の提供を、演習の中で指導として行うことで、学生にとって想像しやすく、より現実のものとして感じ取ることができ、演習後もBLSを身につけておく必要性が高いと認識する(図4)ことに繋がったと思われる。これらのことから、救命センター看護師が学生へ指導することは、自己の将来像を具体的にイメージさせ、学習意欲へと繋がるプラスとしての働きかけの要因となると考える。

V．研究の限界

今回の研究では、単日演習のみで調査した、演習前後の学生の救急看護に対する意識の変化であり、そこから、今後学生の学習行動へ繋がるかどうかの部分では、検討できていない。また、対象者の学年や、教育プログラムなど他の要因も関与していることが推測される点で、評価や検討に限界がある。

VI．結語

救命センター看護師指導によるBLS演習での看護学生への影響について検討を行った。学生への影響を、演習の満足度、演習による救急看護への興味関心の変化、学生の捉えるユニフィケーションの意義の３つの視点から捉えることで、臨床の看護師が学生指導に関わることの利点が多く示された。

IV．引用・参考文献

1) 亀岡智美、竹尾惠子，(2003)：米国における看護実践・教育・研究のユニフィケーションに関する文献の概観，国立看護大学校研究紀要，2(1)

2) 仲井美由紀、澤田かおり、綿貫成明，(2003)：アメリカにおけるユニフィケーションの歴史と現在の動向，臨牀看護，29(8)，1191 - 1197
3) 平賀愛美、布施淳子，(2007.11)：就職3ヶ月時の新卒看護師のリアリティショックの構成因子とその関連要因の検討，日本看護研究学会雑誌，30(1)，97 - 107
4) Nishiyama C、Iwami T、Kawamura T、Ando M，(2008)：Effectiveness of simplified chest compression-only CPR training for the general public：A randomized controlled trial，Resuscitation，79(1)，90 - 96
5) 庄村雅子，(2010.3)：看護教員、看護を分かち合う大切さを痛感する，看護教育，51(3)，197 - 199
6) 山内栄子、松本葉子、山本雅子，(2009.5)：現代の看護系大学生の学生生活における職業的アイデンティティの形成過程，日本看護学教育学会誌，18(3)，11 - 23
7) 大山晶子、矢島道子、鈴木保弘，(2006.11)：学校と臨床の協働による看護技術演習の実施，看護教育，47(10)，876 - 883
8) 池西静江，(2009.4)：PBLテュートリアル教育の実践とその効果，看護教育，599，298 - 304
9) 吉田一郎、大西弘高，(2004.8)：実践 PBLテュートリアルガイド，南山堂，24 - 38
10) B.マジュンダ、竹尾恵子，(2004.3)：PBLのすすめ「教えられる学習」から「自ら解決する学習へ」，学習研究社，10 - 24
11) 大塚眞理子，(2009.7)：看護基礎教育におけるIPEの必要性・有効性と今後の可能性，看護展望，419，9 - 18
12) 田村由美、石川雄一，(2009.7)：神戸大学医学部方式 IPW教育プログラム IPWを意識したIPEの取り組み，看護展望，419，25 - 31
13) 宮崎美砂子，(2009.7)：IPEに向けた組織体制づくり，看護展望，419，19 - 24
14) 兼松有加、佐藤恵美、井出萌子，(2008)：大学生の一次救命処置に対する意識の現状と今後の課題 医学部保健学科看護学専攻生と他学部生における比較検討，日本看護医療学会雑誌，10，44－52